

渡し守

「それから定の有堂」

その二十八

奈良 敏行（笈の定有）

先日 sheepsleep books さんで苦楽堂の石井伸介さんに出会った。本造りの資料集めで地方を旅しているとのことだった。（二〇二五、五、二二）。出版の夢を語って意気軒昂だった。「奈良さんは今どうしているの？」と聞かれた。本屋は閉じたので、今は「読書」をテーマに所を代えて励んでいる、と答えた。「読書！いいね。行き着くところだね」と励まされた。そして「本屋」はいいね、こうして人と人がばったり会えるんだから、と感慨深げだった。

「本屋」があると変わらぬいろいろな人に会える。少し前には編集者の綾女欣伸さんに出くわし、一時間以上も二階の住人共用の応接コーナーで話ができた。本屋の時はほとんど立ち話で終わっていた。

「本屋（本を人にすすめる）」「読書会（一緒に本を読む

む）」「読書（一人で考える）」、これらはわたしの人生の移り変わりだが、この世の輪廻のように感じる。といっても別に解脱しようとは思わない。人は一所に居続けることはできない。いろんな転身をとげることはできる。でもわたしは「本屋」「読書会」「読書」の三つの様相しか思いつかない。

変わるものと変わらないものがある。変わらないものを「本屋的人間」と呼び習わす。「屋」はもっぱら行うの謂だ。もっぱら人に本をすすめる。すすめるために本を読む。この循環に生の躍動を感じる。

ある人に「奈良さんは理想を語りつづける。だから終わることがない」といわれた。それは人に本を届け、伝えることかなと解釈した。身近なところでは、家人は本好きなのだが、いつも頼まれもしないのに、家人のための本を図書館から探してくる。これは本性で、ときに褒められ本屋の仕事を続けさせてもらっているようでうれしい。家人に「渡し守」みたいだね、といわれた。自分は渡らないが人を渡す。輪廻の中の不動のなにかを言い当てられたように思った。本屋的人間が「渡し守」なら、本屋は人が乗り合う「渡し舟」か。

「渡し守」という寓意には、二つ思い当たる。フロアベールの『三つの物語』の中的一篇「聖ジュリアン伝」。も

う一つはヘッセの『シッダールタ』だ。

フローベールは写実的な作家とされるが、この『聖ジュリアン伝』は浪漫的な作品だ。一国の王子として生まれ、王妃には「聖者」になるという予言が届き、国王には「覇者」となるという予言が与えられる。王子ジュリアンは殺戮の覇者となり、やがて放浪してその意志の届かない因縁のもとに両親を殺し、悔いて身を捨てて捨てた果てに「渡し守」となり、ある日ライ病的男を岸へと渡す。そして「お前の体のぬくもりで温めてくれ」という病者の要求にこたえる。その男はキリストの姿を現わし、ジュリアンを抱いて天へ昇る。

一方、ヘッセの「シッダールタ」は近代人だ。

『神々も、我やなんじと同様に想像された、時間に従属する、はかない形体ではなかったか。』

自然（ピュシス）の中に、超越的なものは存在しない。

知識は他人（仏陀）から学ぶことはできるが、知恵は自分の経験の積み重ねの中にしかない。

『前へー前へー！お前は召されているのだー』

『私はどこにも行かない。私は途上にあるだけだ。私は遍歴する』

これがシッダールタの思想だ。いつも「途上にある」、これを「遊戯」と呼び「輪廻（サンサラ）」という。川の

たもとにあつてシッダールタは超越者を渡さない。普通の人として運ぶだけだ。幼い頃からの友であり、荒地でたもとを分かち、仏陀に帰依したゴーヴィンダは、年老いてシッダールタに抱かれ、この川辺で生涯を終える。帰依しないシッダールタを批判し続けた彼だが、末期に際し、シッダールタの安らぎを与える微笑を目にし、覚者の微笑そのものだと言確信する。

ヘッセの渡し守は、存在の声に耳をすまし「穏やかに微笑む」ことができる。それを傾聴者という。

本屋的人間。本を読むことができる。本をすすめることができる。そして考えることもできる。一人で、ときには数人で。「渡し守」という言葉は、また一つ「仕事」の輪廻を一巡させてくれる。そして本屋は人の乗り合う「渡し舟」であったのだと思ひ至る。

2025. 5. 23

フローベール・鈴木信太郎訳 『三つの物語』 新潮文庫

1953

ヘルマン・ヘッセ・高橋健二訳 『シッダールタ 改版』

新潮文庫 2012